慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	《挨拶》について：マラルメ後期状況詩の和訳と注解
Sub Title	Autour de «le Salut» : essai sur la traduction japonaise et le commentaire des vers de circonstance du Mallarmé des dernières années
Author	立花, 史(Tachibana, Fuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.73 (2021. 10) ,p.45- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20211031-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《挨拶》について

――マラルメ後期状況詩の和訳と注解[1)]――

立　花　　史

マラルメには、二種類のテクストが存在する。読まれるものと読まれないもの、注釈されるものと注釈されないもの、後者はどちらかと言うと注釈に用いられるものとなる。

私はここで、韻文と散文の取り扱いの区別を蒸し返そうとしているのではない。詩集『ポエジー』を注釈するために、散文集『ディヴァガシオン』が用いられ、それらを注釈するために、さらに『英単語』『古代の神々』『最新流行』が控えている。ただし注意すべきは、読まれるものと読まれないものとの境界線は、マラルメの韻文作品のなかにも、さらには『ポエジー』のなかにも引かれている点である。

例えば、『ポエジー』冒頭の《挨拶》がそれに該当する。多くの研究者が真っ先に読んでいるにもかかわらず、ほとんど 1、2 頁の注釈で通り過ぎてゆき、その解釈が争点となることはまずない[2)]。それはつまり、注釈するま

1）2018 年 9 月 8 日の「マラルメ・シンポジウム 2018」で筆者は、「詩句に流れる時間の遊び――マラルメ作品を初めて読むために」と題した発表をおこない、そのなかで“魂のソネ”（« Toute l'âme résumée… »）を分析しており、それが筆者の後期状況詩註解の第一弾となる。本稿はその続編に当たる。第一弾については、近々、書籍化予定である。

2）ベルトラン・マルシャルが 1985 年までの先行研究をサーヴェイしているが、比較的詳細に注釈したデイヴィスでさえ 11 頁であり、それ以外ではヌーレ、モーロンが各 1 頁、ジャングー、デルフェル、ヴァルゼル、ミショー、モソップが各 2 頁、コーンが 4 頁、チャドウィックが 5 頁である。Cf.　MARCHAL

でもなく明快で平易な作品だと考えられているからだろう。しかしまた、難解なものだけでなく平易なものも、人は読みとばしてしまいがちだと言ったのは、マラルメその人ではなかったか。

もちろん、読み飛ばされていなくとも、語られにくい事柄はある。例えば、『マラルメ全集』の注釈はたいへんていねいだが、翻訳でも注釈でも語られていないこと、にもかかわらず多くの研究者が同意していることが存在する。研究と称される活動が、既存の論文や研究書で論じられた事柄を踏まえて、いまだ論じられていないことを新たに付け加える活動を意味するのであれば、既存の研究を一新する高度な成果だけでなく、研究者にとって自明に思われてあえて論じられて来なかったことを言語化するのもまた、研究の一部をなすのではないだろうか。

本稿が目指すのは、そうした意味での研究である。本稿では、《挨拶》という詩を考察するが、マラルメの詩を翻訳するくらいマラルメを熟知した研究者なら当然念頭にはあるだろうけれども、かといって翻訳にも注釈にも反映されない部分を取り上げてみたい。そうした部分こそ、これからマラルメを読もうとする新たな読者にとって実は重要だろうと思われるからである。なお、原則的に詩の題名は岩波文庫訳で統一し、論文の最後に、拙訳のほか、全集訳と、岩波文庫訳と、月曜社訳を補遺として掲載しておく[3)]。

予備知識

八音節のソネ（十四行詩）で書かれたこの詩の成立経緯については、マラルメ自身が、詩集の「書誌」のなかで述べているとおり、「このソネは、最近、『ラ・プリューム』誌主催の宴席で、その主賓としての名誉を得て、杯

(Bertrand), *Lecture de Mallarmé*, José Corti, 1985, p. 13.

3）『マラルメ全集』Ⅰ巻、筑摩書房、2010 年、pp. 4–5.『マラルメ詩集』（渡辺守章訳）、岩波書店、2014 年、pp. 20–21。ステファヌ・マラルメ『詩集』（柏倉康夫訳）、月曜社、2018 年、pp. 8–9。原文は次の文献から引用した。MALLARMÉ (Stéphane), *Œuvres Complètes I*, Gallimard, 1998, p. 4. 以下、全集第 1 巻を OC1 として、第 2 巻を OC2 と略記する（*Œuvres Complètes II*, Gallimard, 2003）。

をかかげた際のもの」である。1893 年 2 月 9 日、真冬の宴席で詠まれた。この詩は、同紙 2 月 15 日号に « Toast »（乾杯）の題名で掲載されたのが初出であり、その後、詩集『ポエジー』の巻頭に収められた（そのため岩波文庫訳の題名は「祝盃」となっている）。状況詩でありながら、詩集『ポエジー』に収められためずらしい作品である。

ちなみに、『ラ・プリューム』誌は、1889 年創刊で、ヴェルレーヌやマラルメのほか、モレアス、ラフォルグなど、象徴主義の詩人たちを中心としながら、幅広い書き手が寄稿しており、文学酒場ル・シャ・ノワールやミュシャの特集も組んでいる。同誌の定例の飲み会にマラルメが招待されてこのソネを詠んだということである。また、先に確認しておくべきは、これは乾杯の挨拶の詩ではあるものの、飲み会を始める前の乾杯ではなく、主賓が招待に礼を言う締めの乾杯であり、場所も、縦長のテーブルの上座にマラルメが位置していたと考えられる[4)]。

なお、マラルメはしばしば象徴主義の詩人に分類されやすいが、狭義の象徴主義者ないしは象徴派ではないということは強調してもよいだろう。狭義の象徴主義は、1886 年に若手詩人ジャン・モレアスが宣言した流派であって、マラルメは彼らに慕われていた先行世代の詩人のひとりにすぎない。それどころか、当のモレアスは 1891 年にはシャルル・モーラスとともに古代の伝統への回帰を唱えてロマーヌ派を結成して、早々と象徴主義から離脱している。モレアスが創始した象徴主義に限定すれば、それは 5 年で終わったが、ヴェルレーヌやマラルメを慕う若手の詩人や芸術家のネットワークは、それ以後も続いてゆく[5)]。そういうわけで、《挨拶》が詠まれた 1893 年は、かつ

4）ミシェル・ゴーチエはそう解釈している。GAUTHIER (Michel), *Mallarmé en clair*, Paris, Nizet, 1998, p. 257.

5）例えばマルシャルは、モレアスの動きを踏まえつつ、象徴主義に三通りの用法を確認して、(1) 狭義の象徴主義、(2) 系譜としての象徴主義（ボードレール、ヴァレリー、ランボー、マラルメ、ヴァレリー、クローデルなど、ロマン主義とシュールレアリスムのあいだに位置する巨匠たちの系譜）、(3) 世紀末の空気としての象徴主義（ルドンやゴーギャン、ロダンから、ヴィリエ・ド・リラダン、ヴァーグナーやドビュッシーまで）に分類している。Cf.

ての盟友のうちに離脱者も出て、この酒席にいるメンバーたちも今後どうなるかわからない、そうした空気が多少なりともあったはずである。

この詩について、浩瀚な『マラルメ全集』ではどういう分析がなされているかというと、上述のような経緯のほかは、わずかな注釈しか付されていないが、この詩の重要さを看過しているわけではない[6)]。岩波文庫訳でも、はっきりとこう述べられている。「マラルメが、この八音節のソネに、単なる「挨拶の句」以上の主題を見出し、『詩集』全体の方向性を暗示すると考えたのは、この一見、「気のきいた状況の詩句」が、マラルメの詩法のエッセンスを、きわめて祝祭的な音楽の中に読み込んでいるからである」(p. 227)。

それではさっそく訳してみよう。

《挨拶》試訳（第一稿）

無きにひとしい、この泡、純潔なる詩句	*Rien, cette écume, vierge vers*
それらが示すのは、ただ杯のみ	*À ne désigner que la coupe ;*
<u>まるで</u>、遠くでセイレーンの大群が	*Telle loin se noie une troupe*
水に飲まれて身をひるがえすよう	*De sirènes mainte à l'envers.*
われわれは漕ぎ出ている、おお、さまざまな	*Nous naviguons, ô mes divers*
友人諸君、私はすでに船尾に	*Amis, moi déjà sur la poupe*
君たちは豪華な船首にいて	*Vous l'avant fastueux qui coupe*
<u>数々の雷轟と幾多の冬</u>を切り払う	*Le flot de foudres et d'hivers ;*
甘美な酔いにうながされて私が	*Une ivresse belle m'engage*
その縦揺れも恐れず	*Sans craindre même son tangage*
しっかり立ったままで捧げるこの乾杯の挨拶は	

MARCHAL (Bertrand), *Lire le symbolisme*, Dunod, 1998.

6)『マラルメ全集』Ⅰ巻別冊、筑摩書房、2010 年、p. 25。

De porter debout ce salut

孤独、暗礁、天の星　*Solitude, récif, étoile*
何であれ、われわれの帆布の真白い気がかりに値した
À n'importe ce qui valut
あらゆるものに向けられている　*Le blanc souci de notre toile.*

解　説

注釈者は、この詩のイメージの展開が、アナロジーと言葉遊びで牽引されていると述べ[7]、記号論者は、①航海と②酒宴と③詩という三つのトポスが同時に織り込まれていると分析している[8]。日本語では「縁語」と呼ばれるものに相当するが、近代フランス語ではかなりのアクロバットである。

酒宴という状況から、シャンパンのグラスと、詩人グループの面前での乾杯の身振りに注意が向けられる。シャンパンの泡立ちからマラルメは、écume（泡）という言葉を取り上げて、彼自身が詩句の特性として語る無やたわいなさを想起する。詩と泡のアナロジーが押し進められてゆく。この詩は酒宴のあいさつという役割である以上、酒のなかに消えてゆくものだが、それは、泡を残して海に消えてゆく人魚さながらだ。人魚と詩句が結び付けられることで、詩人の生は船で象徴される。酒宴を仕切るマラルメは船長のいる船尾で、列席する若い詩人たちは、前途多難な船首となる。こうしてシャンパンと船や海とがつながりつつ、マラルメが荒ぶる海の船旅をおそれない様子が、酔いながらも立ち上がってシャンパンを掲げて乾杯する身振りと重ねられる。そして詩人の集まりでの乾杯である以上、それは将来書かれる名作のために求められる白紙に向けられたものでもあって[9]、そのことが

7）DAVIES (Gardner), « Salut, essai d'exégèse raisonnée », *Les Lettres* 9–11 (1948), p. 197.

8）RASTIER (François), « Systématique des isotopies », *Essai de sémiotique poétique*, Larousse, 1972, pp. 80–106.

9）例えば、若書きではあるが最晩年の詩集に収められた「海のそよ風」では「白さが守る何も書かれておらぬ紙」とある（OC1, p. 81）。そのことは、出版

帆布と白さによって喚起されている。

「無にひとしい」と、謙遜とも取れる小さな言葉から第一詩節を始めて、乾杯のために手に持ったシャンパングラスのなかの泡、そして今読みつつある詩句、ささいなものであるこれらが指すのはただグラスのみと言われているように読める。形容詞 vierge は、一義的には真新しさを表しつつ、泡の白さを追認し、セイレーンの乙女らしさを先取りする。

セイレーンがここでは人魚の意味で用いられていると取れるが、「身をひるがえす」については、それほど議論が定まっているわけではない。シャンパンの泡の一つ一つを、遠くの人魚になぞらえているという風に解釈するのが一般的だが、そのうえで、シャンパンの表面の泡が消えてなくなる様子を、人魚が沈んで見えなくなる光景として詠んでいるという風に特定する注釈者もいる[10)]。

第二詩節では、酒宴の列席者に向かって呼びかけられ、その場の状況が船にたとえられている。すでに中年であるマラルメが自分を船尾に、列席する若き詩人たちを船首に位置づけながら、ここに集う者たちが立ち向かうべき試練も述べられている。

第三詩節では、いよいよ「私」が出てきて、酒の酔いと船酔いを重ねつつ[11)]、乾杯に向かう気持ちを述べて、第四詩節では、乾杯が向けられる対象が名指されている。それは、孤立や挫折というネガティヴなものもあれば、目指すべき理想のようなポジティヴなものもあり、いずれにせよ、詩作の際

物と情報の多さに対して、書く側の忘却をたっとぶ身振りと対応している。

10）Cf. BÉNICHOU (Paul), *Selon Mallarmé*, Gallimard, 1999 (1995), p, 423.

11）ちなみにここで、「酔い」が詩人たちの集いに、マラルメという中年詩人と、若い詩人たちの交流の場に生じている点は重要である。散文作品の「孤独」では「この酔い、年長の光と最近のものとの融合」（OC2, p. 257）とある（ただし、本稿で焦点化するのは、そうした融合にとどまらない酔いなのだが）。また彼の「文学基金」の構想も、著作権とパブリック・ドメインを介した世代間の関係性である。この構想については次の拙稿をご参照いただきたい。「ユゴーとマラルメの文学基金――一九世紀フランスにおける知的財産権の一側面」、『日本フランス語フランス文学研究』110 号、2017、pp. 88–103、2017。

に気がかりの対象となったものである[12)]。

「真白い」は、気がかりにかけられているものの、そこには「帆布」の白さがほのめかされており、ここでの帆布は、船の帆に張られた布と、詩を描くページとしてのキャンバス、そしてテーブルクロスを同時に指し示していると言えよう。

試訳の強調点

第一に、ここでは、まず倒置を使わないように努めている。マラルメ作品の翻訳では、しばしば倒置が多くなり、日本語で通読する際には、かなりのストレスとなる。ストレスもまた詩にとって大事なのだが、ネイティヴがフランス語のストレスに直接に出会えるのに対して、日本語ではそれが間接的なものとなり、別のストレスが加わってしまうように思われる。それならむしろ、日本語としてのストレスをなるべく軽減して、まずは内容を汲み取りやすくしておきたい。

第二に、Telle loin だが、tel が男性形であれば、loin にかかって「あれほど遠くで」などと訳すのが妥当だろうが、telle が女性形なので、倒置された主語の une troupe にかかって、例示や比喩を導く。シャンパングラスから人魚に話題が移る際のつなぎとして telle が用いられているので、つなぎとして訳すのがひとまずは適切かと思われる。

第三に、字義通り訳されがちだが、(le) flot de ＋無冠詞複数名詞で、「多くの～」という意味になるので、字義的には波と言いながらも、冬が複数形であるように、flot d'hivers という部分を見ても、特定の冬の具体的な波を表していないのは明らかで、雷轟や冬（の時代）の多さが名指されている。そのことを踏まえて、あえて波の意味を消して、「数々の雷轟と幾多の冬」と訳してある。

---

12)《ひたすらに　船を進める》のソネでも、航海の文脈において「夜、絶望、そして宝石」という三つが並べられている（OC1, p. 41）。

《挨拶》試訳（第二稿）

第一稿の課題

「純潔な詩句」の「純潔」が文脈的に唐突である上に、読み進めても、その含意が回収されている感じに読めるかというと、かなり微妙である。

この詩において乾杯はいつおこなわれているのだろうか。「乾杯！」という趣旨の内容を現在進行形で詠んでいるのか、あるいはすでに終わった行為を描写しているのか、その辺があいまいすぎるように思われる。そこで第一稿に手を加えて、第二稿を作った。

無きにひとしい、この泡、まっさらな詩句	
	Rien, cette écume, vierge vers
それが示すのは、ただ杯のみ	*À ne désigner que la coupe ;*
まるで、遠くでセイレーンの大群が	*Telle loin se noie une troupe*
水に飲まれて身をひるがえすよう	*De sirènes mainte à l'envers.*
われわれは漕ぎ進むのだ、おお、さまざまな	
	Nous naviguons, ô mes divers
友人諸君、私はすでに船尾に	*Amis, moi déjà sur la poupe*
君たちは豪華な船首	*Vous l'avant fastueux qui coupe*
押し寄せる四方の雷轟と幾年の冬を切り払う	
	Le flot de foudres et d'hivers ;
甘美な酔いにうながされて私は	*Une ivresse belle m'engage*
その縦揺れも恐れず	*Sans craindre même son tangage*
しっかり立ったままでこの乾杯の挨拶を	*De porter debout ce salut*
孤独、暗礁、天の星	*Solitude, récif, étoile*
何であれ、われわれの帆布の真白い気がかりに値した	

	À n'importe ce qui valut
あらゆるものに捧げたい	*Le blanc souci de notre toile.*

試訳の強調点

第一詩節の冒頭では、三つの語句が並列されているものの、rien は補語にも取れる上に、泡には指示形容詞がついているが、詩句は無冠詞なので、三つともステータスが異なり、「詩句というこの泡は無きにひとしい」とも読める。つまり三つの語句が並び、三つのトポスにかかわるが、指し示されているのは一つの対象である（以上から、「それら」ではなく「それ」としておくのが穏当だろう）。しかもその対象が、詩句（vers）であるとするなら、今読まれつつある詩句は新しいものであるし、同音異義語の杯（verre）で今ここにある杯を読み込むとしても、泡が汚れなき白さをまとっていると同時に、乾杯のために注ぎなおされた新しいものだろう。だから vierge は、ひとまず「まっさら」と訳出しておく[13)]。

第二詩節は、「友人諸君」への呼びかけとなっているので、nous naviguons も、「漕ぎ出している」という事態を示す発話行為であると同時に、自分たちのやるべきことを提案した発話媒介行為としての側面を持っていると考えられる。そこで、その両方の意味で取れるように、「われわれは漕ぎ進むのだ」とした。

同じく第二詩節で、moi のあとには前置詞 sur があるが、vous の前には前置詞がない。これは省略されているとも取れるが、vous のあとにそのまま続ける方が、vous で呼ばれている者たちが、まさに「豪華な船首」そのものであって、試練を受ける最前線であるようなニュアンスが強まるので、前置詞や動詞は補わないでおこう。

同じく第二詩節に見られる flot　de の用法については上で述べた。たしかに一義的には、波の意味がないので、波と訳さない選択も妥当だが、しかし

13）新しさを表す修飾句としてこの語を用いている例に、「唯一人、滑らかに、魔術師の如く……」という散文がある。「モスリンの布地のようにまっさらな主題」とある（OC2, p. 183）。

字面に flot があるという情報自体が訳文から消えてしまうのも惜しいので、雷轟の空間的ひろがりと、冬の時代の時間的広がりを考慮しつつ、「押し寄せる」を補った。

第四詩節の engager は、この詩でもっとも重要な動詞かもしれない。動詞 engager ＋人＋ à ＋不定詞（古くは de ＋不定詞も同じ意味で併用されていた）は、「人に～するよう強く促す」の意味なので、乾杯はおこなわれておらず、酔いに促されて、乾杯したいという気分になっているだけなので、「捧げたい」と訳してみた。

《挨拶》試訳（第三稿）

第二稿の課題

第二稿で「捧げたい」と訳してみたが、これでもまだ問題がある。「捧げたい」とすると、もうすでにこれは明確に乾杯の挨拶になってしまう。しかし、engager は、あくまで捧げたいという気分を示すものでしかないはずだから、「捧げたい」ではニュアンスを十分に訳出できていない。

それだけではない。この詩に、直説法現在は、se　noie と naviguons と m’engage の三つしかないが、一つめは比喩にすぎず、二つめは半ば提言で、三つめは気分の表れであって、どれ一つとして、客観的な事態や行為をはっきりと表してはいない。またそのおぼろげな様子は、冒頭の三つの語句が、繋辞の動詞もなく並べられている辺りや、第四詩節にも出てくる単語の並置によっても強調されている。

要するに、この詩を訳す上では、事実を示すような表現を排して、眩暈のするような浮遊感を強調するのが妥当だろう。そう考えつつ、試訳をさらに書き換えた。

無きにひとしい、この泡、まっさらな詩句	
	Rien, cette écume, vierge vers
それが示すべきは、ただ杯のみ	*À ne désigner que la coupe ;*
まるで、遠くでセイレーンの大群が	*Telle loin se noie une troupe*

水に飲まれて身をひるがえすよう　*De sirènes mainte à l'envers.*

われわれの方は漕ぎ進むのだ、おお、さまざまな
Nous naviguons, ô mes divers
友人諸君、私はすでに船尾に　*Amis, moi déjà sur la poupe*
君たちは豪華な船首　*Vous l'avant fastueux qui coupe*
押し寄せる四方の雷轟と幾年の冬を切り払うところ
Le flot de foudres et d'hivers ;

甘美な酔いにうながされると私は　*Une ivresse belle m'engage*
その縦揺れも恐れず　*Sans craindre même son tangage*
しっかり立ったままでこの乾杯の挨拶を　*De porter debout ce salut*

孤独、暗礁、天の星　*Solitude, récif, étoile*
何であれ、われわれの帆布の真白い気がかりに値した
À n'importe ce qui valut
あらゆるものに捧げたくなる　*Le blanc souci de notre toile.*

試訳の強調点

本作が、揺らぎの詩であることが見えてきたので、そのニュアンスを織り込んで、訳文全体を見直してゆく。

第一詩節の二行目の à ne désigner que la coupe も、あえて動詞を不定形にとどめているので、実際に示していると読まれないように、「それが示すべきは」として、あくまで示そうとする身振りにとどめた。

第二詩節で付け加えるべきニュアンスがあるとすれば、それは、冒頭で nous が召喚されている理由だが、第一詩節ではセイレーンたちがおぼれているのに対して、われわれはそうならないという意思が込められていると考えられる。セイレーンの方ではない「われわれの方」を強調しておいた。

同じく第二詩節で、「切り払う」で止めると、事態を表すかのように読め

るので、切り払う船首、切り払う役どころ、の意味で、「ところ」を置くことにした。

第三詩節の engager をどう訳すべきだろうか。通常は、催促や強い促しの意味だが、訳し方はさまざまである。参考になるのは、小学館の『ロベール仏和大辞典』の用例だろう。

Le beau temps nous engage à sortir.
「天気がよいと外出したくなる」

「したい」ではなく「したくなる」と、少し突き放して訳すことで、nous の主体性を欠いた自動性が、それどころか、ある種の周期性までが、訳出されるように思われる。

本作に戻るなら、ここで engage の主語も興味深い。不定冠詞の Une belle ivresse は、酔いの任意性を強調しているように見える。「何がもたらす酔いかはともかく、それが甘美なものであれば、決まって、無性に、私は〜がしたくなる」と言わんばかりである。

暫定的な総括

本作では、être のような状態動詞がすべて省かれ、動詞はときに、不定詞のまま置かれている。数少ない直説法現在の動詞もまた、ほとんど、客観的な事態や行為をさすものではない。したがって、翻訳上も、そうした含意がなるべく表れるように訳すのが妥当だろう。

そのことがもっとも当てはまるのが「乾杯」の部分である。われわれは、この詩が、酒宴の席で乾杯の挨拶として読まれたことを知っている。それゆえ、乾杯という行為に帰着するものとして訳しがちである。しかし、この詩のなかで、マラルメは乾杯の言葉をはっきりとは言わず、あくまで気分を表明しているだけであるのみならず、その気分さえも、甘美な酔いからもたらされたまったく自動的かつ受動的なものとして語られているのである。

身振りの推量

マラルメは、酒席で、乾杯の言葉を述べるに際して、この詩を詠んだことは知られているが、しかしどのように詠んだのかは知られておらず、誰も論じていない。そこで、試みに、詩の内容に対応してマラルメがふるまったと仮定して、その動きをイメージしてみることにする。その方が、状況詩としてのこの詩のニュアンスがより具体的につかめるはずだ。

「無きにひとしい、この泡、まっさらな詩句／それが示すべきは、ただ杯のみ」（v.1–2）

まずマラルメは、シャンパングラスを胸元の高さに持って乾杯に備えて、泡が浮かぶグラスに視線を落とすが、「ただ杯のみ」で、ややグラスから顔を離したのかもしれない。

「まるで、遠くでセイレーンの大群が／水に飲まれて身をひるがえすよう」（v. 3–4）

顔を離したグラスを、少し目を細めて遠景のように覗き込んだのかもしれない。

さきほど、シャンパンの泡を人魚になぞらえる解釈を紹介したが、マラルメの詩では、しばしばグラス＝ガラスが効果的に用いられているので、ここでも、身をひるがえすセイレーンの大群とは、グラスによって上下が反転した列席者たちの姿だと解釈することもできる[14)]。

「われわれの方は漕ぎ進むのだ、おお、さまざまな／友人諸君、」（v. 5–6）

ここでマラルメは、視線をグラスから視線を上げて、少し声の音量を上げ、「さまざまな」でゆっくりと聴衆たちを見まわしていた可能性がある。

14）Gauthier, op. cit., p. 257.

「私はすでに船尾に／君たちは豪華な船首」（v. 6–7）

自分の足元に目をやり、つづいて聴衆たちに視線を戻したのかもしれない。

「押し寄せる四方の雷轟と幾年の冬を切り払うところ」（v. 8）

マラルメは、聴衆のさらに向こうを見るか、もしくは、真冬の窓の外を見たのだろうか。

マラルメと聴衆が対面しているこの場の外に、マラルメと聴衆にとっての試練や目指す先があることをほのめかす（「孤独、暗礁、天の星」の伏線にもなる）。

「甘美な酔いにうながされると私は／その縦揺れも恐れず／しっかり立ったままでこの乾杯の挨拶を」（v. 9–11）

もう一度、視線を聴衆からグラスに戻し、場合によっては、たわむれに少し揺れて見せるも、姿勢を立て直して、おもむろにグラスを少し掲げていたのかもしれない。

「孤独、暗礁、天の星／何であれ、われわれの帆布の真白い気がかりに値した／あらゆるものに捧げたくなる」（v. 12–14）

何かを思い出すような風に、孤独、暗礁、天の星を列挙して、「われわれの帆布」以降で、近くに置かれた書籍か、テーブルクロスに目を向けながら、にこやかな表情を浮かべた可能性がある。ここで、マラルメは詩の最後まで杯を高く掲げることはなく、少し掲げた状態のままでいるか、詩の終わりとともにいったんグラスを元の位置に下げ、読み終わったあとに、あらためて、杯をみんなで掲げて乾杯をしたのかもしれない。

推量の強調点

「書誌」には、« ce Sonnet, en levant le verre » とあるが、杯を掲げる際に

詠んだのか、杯を掲げながら詠んだのか、掲げながらであればどういう風に掲げたのか、よくわかっていない。本稿では、杯を掲げる際に詠んだと捉えている。いずれにせよ、乾杯の場で乾杯の詩を読むと、その意志は伝わるが、マラルメはそれを明示的に伝えていない。状況と作品をあえてずらして、そこから作品の妙味を引き出している。

また、最後の動詞 engager の受け取り方で、身振りも変わってくる。この詩は、詩集の冒頭に置かれたということもあり、厳粛に受け止められる傾向にある。最終詩節では、乾杯の対象からして、詩人として自分を悩ませたものをすべて肯定する勇敢さと賢明さに満ちた態度にも見える。その場合、この詩の最後のほほえみは、深みのあるものとなるだろう。しかし、そうした乾杯は、マラルメの自発性に基づくものとも言い切れない。甘美な酔いに身を任せると、つらかったことや苦しかったことが、すべてどうでもよく思えてしまう。そういう酔いの勢いで、自分の気がかりの種に乾杯しているのだとも受け取れる。その場合、この詩の最後のほほえみは、少々軽率さを交えた軽いものとなるだろう。

《挨拶》の重層性

マラルメの詩は、複数のレイヤーから構成され、同時に全体をうかがい知るのはむずかしい反面、各レイヤーを探索しながら時間をかけて楽しめるよう構築されている。本作もまた、平易な詩ではあるが、さまざまなレイヤーから構成されていることをあらためて指摘しておこう。

まず、詩集のなかで、巻頭のこの詩だけが、原文はすべてイタリック体となっているため、おぼろげで、揺らぎを感じさせる。内容に対応した字体が選ばれている。

韻律法に関しても見ておこう。第一詩節では、詩句とりわけ韻文を意味する vers が、l’envers と脚韻を踏む（ちなみに、グラスを意味する coupe には韻文の切れ目の意味もある）。さらにそれを強調するかのように、第二詩節では divers と d’hivers の二音節にまたがる押韻も登場する。第三詩節以降においても、m’engage と tangage、salut と valut が二音節で押韻している。

このように豊かな脚韻は、一般に「バンヴィル風脚韻」と言われるが、そのリファレンスに対応するように、内容上も、バンヴィル風のアクロバットと諧謔性をかもしている。

構文の水準でも、酔いがもたらす足元のおぼつかない浮遊感は、1 行目と 12 行目の名詞の並置や、動詞の省略、不定形の使用、そして客観的な事態や行為を表現しない直説法現在の活用などが見られるのは、前述のとおりである。

単語の水準でも、字義と転義を同時に活用している箇所がいくつも見られる。名詞 écume はシャンパンの泡と同時に、泡のようにささいな詩句の比喩でもある一方で、形容詞 vierge は、新しさと汚れなき白さとセイレーンの純潔さを表しており、名詞 foudre の雷轟にも二義性がある。

単語にとどまらない語句や文の水準でも、同様の現象が見られる。本稿で和訳に苦心した「押し寄せる四方の雷轟と幾年の冬」では、船が、荒れた海を進む様子を踏まえつつ、波のように押し寄せる雷鳴と冬のなかを航海する光景が描かれ、それがさらに、この酒席に集まる詩人たちの先行きの厳しさを表してもいる。

以上の点は、三つのトポスの重なりとして全体を貫いており、トポス同士が共鳴し合う形で、いっそう豊かなニュアンスをかもしている。

さらに、本作は、状況詩として詠まれたあとに詩集に収められたという事実によって、コンテクストの点でも重層化している。年配の詩人で象徴主義者たちの領袖でもあるマラルメの位置が、この詩の状況として存在している一方で、詩集の巻頭作品として他のマラルメ作品全体の導入としての役割も与えられている。後者のゆえに、本作は、マラルメ詩学を体現する厳かなものと捉えられる一方で、本稿で指摘したように、酒宴の状況に寄せれば、酒の勢いを描いたユーモアも見てとれる。

また本作は、その巻頭作品という位置を別にしても、危険をともなう航海を主題とする点で、詩集の内部では《ひたすらに　船を進める》や《圧し懸かる　密雲の下》という 2 編のソネと関係が深いと同時に、詩集の外部では、その字体の活用もあわせて、「賽の一振り」とも関係が深い。

さらに、マラルメ以外の作品との関係では、うっすらとではあるが、セイレーンがらみで、ホメロスの『オデュッセイア』、同じ19世紀では、ロマン主義の詩人アルフレッド・ド・ヴィニーの「海の投壜」ともつながっていると言えよう。

《挨拶》の重層性をまとめると、おおよそ下図のようになる。

	カテゴリー	機能	実例
第1層	モルフォロジー	タイポグラフィの形象化	朧気さをかもすイタリック
第2層	プレテクスト	韻律法の活用	バンヴィル風の脚韻と諧謔性
第3層	テクスト	構文の活用	単語の羅列、動詞の選択
第4層		単語・語句の字義と転義の二重性	écume, vierge, foudre
第5層		描写と比喩の二重性	le flot de foudres et d'hivers
第6層		主題同士の相互作用	酒宴、航海、詩の主題系
第7層	コンテクスト	伝記的事実の活用	年長の詩人、象徴派の領袖
第8層		読まれたり書かれたりする文脈	酒席の乾杯／詩集の巻頭作品
第9層		著者の内的な相互テクスト性	「賽」& « Au souci de... » ...
第10層		著者の外的な相互テクスト性	*Odyssée* & « Bouteille à la mer »...

むすび

すでに本稿で何度も述べたように、《挨拶》のなかでは乾杯の挨拶を捧げていないにもかかわらず、乾杯の意を余すところなく伝えているところに、彼の「ほのめかし」の詩学を読みとることができる。また本作のなかでは、本作自体を指すと思われる、マラルメが語り始めたばかりの「まっさらな詩句」に言及されていた。さらに、乾杯の挨拶は、詩そのものに直接に捧げられると言うより、詩をとりまく状況や詩の目指すところに捧げられる。このように、詩のなかで詩を主題としたり、詩人として詩の条件や環境にまで思

いを巡らしたりする身振りは、いかにも彼らしい。

ここから、詩をとりまくものを詠むことによって、それを共有する詩人仲間たちへの挨拶にもなっている[15)]。さらにそのような本作が詩集の巻頭に収められることで、詩とその制作に、さらには詩の読者に対する挨拶にもなっており、詩は、「波の酔いに捉えられ、座礁の泡を運命づけられた永遠の航海船」だと言ってみることもできるだろう[16)]。

しかし、それでは少々きれいごとすぎる。

この詩は、航海、酒宴、詩という三重の主題が織り込まれているが、別々に織り込まれている保証はない。マラルメは、「語に主導権を与える」[17)]ような作品のあり方をよしとしたが、通常の言語とちがい、本作の主題系にのっとって言えば、詩の言語は人を酔わせる。酔いに主導権をあたえて、味わうものと言える。

晩年のマラルメは、祝祭（fête）の名の下に、群衆と共有すべき理想的な舞台表現を模索したが、同時に、読書を「孤独な祝祭」[18)]とも呼んだ。マラルメの使う fête には、宗教的な神秘と儀式的な手続きの含みがあるが、パーティのような祝い事の楽しみという含みもそこにはひそんでいると考えられる。読書とは、酒宴のような集団的な楽しみを、一人で味わうものなのだ。

ただし、航海や酒宴のように、詩もまた人を悪酔いさせ、依存や体調不良のような危険を及ぼしかねないものである。こうしたアディクションの主題は、先行世代の詩人ボードレールを引き継ぎつつも、同時代の「退廃」論にもつながっており、それに応答するマラルメ詩学の“治癒的”な側面にもかかわっている。だがこれについては稿を改めたい[19)]。

15）BÉNICHOU, op. cit., p. 424.

16）MARCHAL, op. cit., pp. 15–16.

17）MALLARMÉ (Stéphane), *Œuvres Complètes II*, Gallimard, p. 211.

18）BARBIER (Carl Paul), *Documents Stéphane Mallarmé III*, Nizet, 1971, p. 364.

19）アディクションの主題については、すでに上掲の発表「詩句に流れる時間の遊び」のなかで論じている。なお、本研究は、JSPS 科研費 JP19K13141 の助成を受けたものである。

無きにひとしい、この泡、まっさらな詩句
それが示すべきは、ただ杯のみ
まるで、遠くでセイレーンの大群が
水に飲まれて身をひるがえすよう

われわれの方は漕ぎ進むのだ、おお、さまざまな
友人諸君、私はすでに船尾に
君たちは豪華な船首
押し寄せる四方の雷轟と幾年の冬を切り払うところ

甘美な酔いにうながされると私は
その縦揺れも恐れず
しっかり立ったままでこの乾杯の挨拶を

孤独、暗礁、天の星
何であれ、われわれの帆布の真白い気がかりに値した
あらゆるものに捧げたくなる
（立花訳）

無なり、この泡、処女なる詩句
務めは　ただ　盃を示す、
さながら　はるかに　沈む群れは
セイレーンの姿、数多（あまた）　腹翻しつつ。

船で行く、おお、我がさまざまなる
友たち、我ははや　艫にあり、
君たちこそは、船を飾る豪奢、切って進む
荒海は、雷と　冬の嵐、

美酒（うまざけ）の　酔いの誘えば　抗えず
酔いの船足　それも　恐れず
高々と　献げる　この祝盃は

孤独、暗礁、天なる星
何にてもあれ、他ならぬ　その値（あたい）とは
我らが布（きぬ）の　白き苦しみ。
（岩波文庫訳）

何ものでもない、この泡立ち　処女である詩句
ただ、グラスを指し示すばかり。
あたかも遠く、人魚が群がって
身を躍らせて沈んで行くよう。

われら海を行く、おお　わがさまざまの
友らよ、私はすでに艫にあり、
君らは舳（へさき）、はなばなしくも掻き分ける、
雷と轟く真冬の波浪を。

美しい酔いにさそわれて、
船の動揺をものともせず
私は立って、この乾杯を捧げる、

寂寥、暗礁、極北（かなた）の星、
われらの帆の真白い悩みを
得させてくれた　あらゆるものに。
（全集訳）

何もなく、この泡、処女なる詩句が
ただ杯を示すのみ、
あれほど遠くであまたの人魚の群れが
ひるがえって水中に姿を没する。

おお、私の多様な友たちよ、
私たちは海をいく、私はすでに船尾にあり、
君たちは輝かしい船首に座り
雷と真冬の波浪を切り裂き、

美しい酔いのままに
たて揺れも恐れることなく
立ってこの杯を持ち

孤独、暗礁、星
何であれ　私たちの帆の白き
悩みに値するものに捧げよう。
（月曜社訳）